

本田財団レポート No.104

## 「動の文化論」

静岡文化芸術大学学長・東京大学名誉教授

木 村 尚 三 郎

財団法人 本田財団

## 講師略歴

木村 尚三郎 (きむら しょうさぶろう)

静岡文化芸術大学学長・東京大学名誉教授



### 《学 歴》

昭和28年 3月 東京大学文学部西洋史学科 卒業

### 《業 歴》

昭和33年 4月 日本女子大文学部 助教授  
昭和34年 4月 東京都立大学法学部 助教授  
昭和41年 5月 東京大学教養学部 助教授  
昭和51年10月 同 教養学部 教授  
平成2年 3月 同 上 定年退官  
同 年 東京大学名誉教授  
平成12年 4月 静岡文化芸術大学(新設、浜松)学長

現在に至る

### 《受賞歴》

昭和50年 日本エッセイスト・クラブ賞(第23回)  
平成2年 運輸省交通文化賞  
平成8年 横浜文化賞  
平成9年 NHK放送文化賞

現在 財務省関税・外国為替等審議会 会長  
国土緑化推進機構 理事長  
全社協・中央福祉学院 院長  
北九州市 コンベンション・ビューロー 理事長  
鹿児島県文化振興財団 理事長  
鹿児島県立霧島国際音楽ホール 館長  
助成財団センター・理事長  
トヨタ財団 理事長 等を兼務する。  
2005年日本国際博覧会総合プロデューサー

専門分野 フランス社会史、西欧中世史、現代文明論

このレポートは、平成15年(2003年)6月5日 パレスホテルにおいて行われた第89回本田財団懇談会の講演の要旨をまとめたものです。

## 史上空前の民族大移動の時代

「動の文化論」という不思議な題を掲げましたが、「ヒト・モノ、みな動く」時代がやってきたのではないかと、ということでございます。あるいは、「動く」ということが当たり前で、じっとしているほうがアブノーマルな時代と言えます。

現在、全世界的に 7 億弱の人が外国旅行に出ています。最近のイラク戦争とか、SARS とか、その前の 9.11 テロ事件等々の影響で動きが鈍っていることは事実ですが、それにもかかわらず、今、史上空前の大移動の時代がやってきていることも確かであります。もうひとつの WTO(World Tourism Organization = 世界観光機関)はスペインのマドリッドに本部がありますが、ここでは、今は 7 億だが、これが西暦 2010 年には 10 億になり、西暦 2020 年には 16 億に伸びるだろうと予測しております。したがって、21 世紀最大の産業は旅産業、観光産業であると言えるわけです。

## 人口より多い観光客で溢れるフランス

ところが、わが日本にやってくる外国人は年間 500 万人しかおりませんで、世界 35 位というランクにあります。1 位はフランスで 7,600 万人の外国人観光客が来ております。国民の数は 5,800 万人ですから、外国人観光客のほうが国民の数よりも多いということになります。普通はバカンスというと 6 月の末から始まりますが、フランスは 5 月になりますと、イギリス人をはじめとして世界中の爺さん婆さんがバスに乗って団体でやってきて、フランス中をワーワーカーカー言いながら走り回っている。地方都市などは、ときどきそういう団体にぶつかりますと、ホテルがいっぱいになってしましまして、私のように車の運転も出来ず、地方を個人旅行しておりますと、えらい目に遭うこともございます。これは最近の大きな変化であります。

南フランスにカルカソンヌという所があります。ここは中世の城壁都市ですが、そこには大変まずい料理があります。カスレと言いますが、カスみたいな料理なのでカスレと言うんじゃないかと思ってきました。豆とベーコンの田舎料理です。これが同じ店で 30 年前に食べたときとは比べものにならないくらい美味しくなっているのでびっくりしたのが、3 年前のことです。大勢の人が来ることによって、味が磨かれたのではないかと思います。

ます。

また、このカルカッソヌという所は、今はトロッコ電車みたいなのが無軌道でグルグル回っていたり、女性の馭者の馬車が走っていたり、目を覆わんばかりの俗化光景が見られますが、これも沢山の人が来るからでしょう。

#### 観光で世界 35 位の日本から脱皮するために

これまで世界第 2 位の観光国はアメリカでしたが、例の 9.11 の事件からスペインに取って代わりました。ですから、2 位がスペインで、3 位がアメリカ、4 位がイタリア、5 位に中国が入っています。中国は世界の工場大国だけでなく、同時に観光大国でもありまして、WTO によりますと、2020 年には中国が観光 1 位になるだろうと予測しております。第 6 位にイギリスがきておりますが、ずっと下がって行ってやっと日本は 35 位に位置している。だいたい 500 万人ぐらいのオーダーで、韓国は 32 位で、日本は韓国よりも下であります。

これではいかんということで、「観光立国懇談会」が 1 月 21 日から総理の私的諮問機関として始まりました。私はその座長を仰せつかりまして 3 カ月間議論をしたあげく、4 月 21 日に報告書を出しました。テーマの副題として、「住んでよし、訪れてよしの国づくり」を付けさせていただきました。これはつまり、その土地の人にとってもいいし、よそから来る人にとってもいいような国づくり、まちづくり、地域づくりをこれから進めるべきではないかということであります。その根底にあるのは、全世界的に大移動、大交流の時代が来たからであります。

今日もおいで菊竹清訓先生とは一緒に 2005 年の愛知万博の総合プロデューサーを務めさせていただいておりますが、この万博のテーマが「自然の叡知」と決まっていたものですから、これではわかりにくいということで、その副題も「地球大交流」ということにさせていただきました。

自然から叡知を引き出すという場合、日本のように自然とともに生きる国もありますし、ヨーロッパやアメリカのように人間よりも自然を下に見てきた国もあるわけで、土地ごとに自然との付き合い方が違うものですから、そのような知恵をお互いに交流させ合って、これからの「くらしといのち」の輝きを増していこうではないかということで、「地球大交流」という副題を付けさせていただきました。

## 非日常の体験を求めたかつての旅

このような大移動、大交流は、不安につき動かされて起こります。反対にかつてのわれわれの旅は、レクリエーションの旅、気晴らしの旅でした。四六時中働いてばかりいるのでは身も心もくたびれてくるから、ときどきリフレッシュさせなければならないということで、普段やらないことをやって気晴らしをしました。

温泉に行って豪快にお湯を溢れさせるとか、山海の珍味をお膳一杯に並べるとか、あるいは、日頃は難しい顔をしている社長さんが、そのときばかりはバカをやる。タコ踊りか何かをやって、それを見てヒラ社員がアハハと笑って馬鹿にする。これも日常とは掛け離れたことであります。

こういう旅がかつての旅だったわけですが、今はむしろ、「ためになる楽しさ」が求められているのではないか。

## 先行き不安で驚きや喜びが感じられない現代

全世界的に今は知恵の手詰まりの状況で、何をどうしていいか、国も企業も個人もよくわからない時代になってまいりました。かつてのように進歩・発展というものが基本にあって、技術なり工業製品なりがどんどん発展して行って、全身に大きな驚きと喜びと幸せを与えてくれる。そういう状況が今は非常に乏しくなってまいりまして、頭を刺激する IT の技術は発展してまいりますが、首から下がなかなかついていけないという状況です。

本田技研の「アシモ」のようなものが実際に家庭で実用化され、介護ロボットに使えるとか、ついでに玉子焼きも作ってくれるということになると、また話は別でありまして、全身に大きな驚きと喜びと幸せが広がりますから、人生観まで変わる人も出てくるかもしれません。しかし、これはまだまだ先のことのようにして、聞くところによると、あと 30 年ぐらいかかるのではないかという話であります。

あるいはガンの治療法が確立されるということになれば、たとえ保険がきかなくても、これはまた大きな驚きと喜びと幸せが全身に広がりますので、ぜひともそういう技術は入手したいと思いますが、現在のところ、ガンの治療法の確立どころか、原因すらまだよくわかっていないという状況がございます。

ましてや空を歩けるとか、車に羽が生えて空を飛ぶとか、昔の人が考えたような大きな話は今はなくなってきているのではないかと思うわけです。かつては青空にポッカリと白い雲が浮かんでいて、それを目指して息を弾ませて坂を駆け上がっていく。これを司馬遼太郎さんは『坂の上の雲』という国民的な小説に仕上げたわけで、以前は未来に対して心弾むものがあったわけですが、それが今はフッと消えてしまった。これは全世界的な傾向でございます。

#### 技術文明が成熟しきったとき、人間は動きを始める

こういうときに人はどうするかとなりますと、決まって「動く」ということを考えます。じっとしていられるのは将来に対する確信があるときです。こういうときは一所懸命、一つ所に命をかけてじっとしている。たとえ不作・凶作のときがあっても、来年か再来年になれば確実に豊かな収穫が期待できるとなれば、人間は動きません。ところが、3年、5年、10年とずっと不作が続いて、これからいつ豊作になるのか見通しがきかないとなりますと、他にもっといい土地はないかと動きだします。

この会社にこのまま居ていいのか、どこかに転職したほうがいいのかと考える。20代の人8割は転職を考えているといわれますが、これも無理からぬことかと思うのです。成功している大会社の社長さんも、「今はいいが、来年はわかりません」と真顔で言われます。経営者の方だったらどなたでもそのような思いをもっていられるのではないかと思います。

自動車メーカーなら、昔は「モータリゼーション」の一言で、ともかく車をガンガン作って、売って、それでだれもが称賛を惜しまなかったわけですが、今では環境問題だの、省資源・省エネルギーだのを考えなければいけない。ということは、まさに今、技術が衰えているからだと思えます。昔は、技術によって環境破壊などの悪いことが起これば、また技術でカバーすればいいではないかという確信がありました。今は技術でカバーできないからこそ、省エネに心がけるとか、環境に配慮するとか、細かいことをしなければいけないわけで、つまりは技術文明の成熟期が来ているのだと思えます。

次の画期的な技術文明がいつ、どういうかたちで大きく花開くか、それとともに未来に対する確信のようなものがいつ再び生まれるのか、そこがよくわからない時代です。そのようなとき、人間は必ず動きだします。たとえばよくありませんが、身内が病院に入って、

生きるか死ぬかわからないというときは病室の前でオロオロします。オロオロしたって治るわけではないのですが、オロオロする。病院が治すのだからオレは関係ないといって家で大の字になって寝ている人がいたら、それはちょっと変わった人で、なかなかそれだけの精神的な安定が得られない時代であります。

### 動きに合わせて使うもの、食べるものが今の売れ筋

家でじっとしているよりは外を歩いていたほうが心が休まる。ということで、携帯電話などを持って歩いています。実際は電話を持って歩かなければいけないほど、差し迫った状況があるわけではない。親の死に目に会えないとか、円が1円上がったとか下がったとかいう話ではなくて、「今、駅」なんてつまらないことを言っている。それでも歩きながら友達と話していると、安心感があります。

あるいは、今、みんなボトルを持って歩いています。アフリカの沙漠の真ん中じゃあるまいし、あんなものを持って歩かなくても、喉が渴いてバツタリ倒れるなんていうことはないのですが、歩きながら飲めると、それ自体が安心で、うれしい。正座して、お湯を75度に落として心を込めてお茶を立てる。そのお茶よりは確かに美味しくはないが、冷えていてもそれなりに美味しいということで、健康志向と相まって、ボトルのお茶が今はよく売れています。

動きながら冷えてしまっても、それなりに美味しいものは売れております。横浜の崎陽軒のシューマイなども、冷えていてもそれなりに美味しいというのでけっこうお弁当に使われていますし、おにぎりがよく売れるのも、まさに冷えていても美味しいからです。お寿司は、むしろ冷えてなくては美味しくないといいものです。フランス料理で言えば、オードブルに当たるもので、これを常食するというような動きが広まりつつあるのではないかと。昔のように時間と場所を決めてそこでじっと座って食べるのではなく、いつでも、どこでも食べられるのがいい、ということです。

お弁当は、今、大流行りでありまして、東京駅の八重洲口にある大丸地下1階の弁当売場などは新幹線に乗るビジネスマンでごった返しております。

ノート型パソコンも持ち歩くものですし、腕時計にしても、何個も持つようになってきています。時計自体も動いておりますし、秒針の動いているのを見て、「ああ、時計も動いている。私も生きてるんだ」ということで安心するようでございます。



## 気候の変動も人間を移動させる一因に

ずいぶん昔の話になりますが、西暦 4 世紀から 6 世紀にかけてゲルマン民族大移動という歴史的事象がありました。ゲルマン人が東から西のほうに動いて、フランス、ドイツ、イギリス、イタリア、スペインその他の国のもとをつくったわけです。何で動いたかということが最近わかってまいりましたが、古気候学（パレオクリマトロジー Paleoclimatologie）というのが発達しまして、それによりますと、当時、ひどい寒期が襲ってきたため、ゲルマン人は心細くなりまして西に動き、それから主として南に動きました。

古気候学は多岐にわたっております。花粉の中身は溶けてしまうのですが、殻だけは固いのが残ってしまっていて、地層のどの辺に寒帯に適した花粉があるか、温帯に適した花粉があるかを調べますと、いつごろ寒かったか、暑かったかがわかってまいります。これが花粉学（パリノロジー）です。

あるいは氷河学（グラシオロジー）というのがあって、寒いとアルプスの氷河の先端（ラング、舌）が岩石を削って下へ降りてきて、温かくなると「舌」が上へ上がっていく。そのときは岩石の粉を残していくわけです。そこに埃などが積もりまして、地層の断面を切ってみますと、ラング（舌）が下へ伸びてきたときと上へ上がっていったときがわかるものですから、何世紀ごろは寒かったか、暑かったかがわかります。

そういうことから、4 世紀から 6 世紀のヨーロッパは寒かったことがわかったわけで、西へ動いたり、西から南へ動いたということです。人間は不安に駆られると、どうも西に動くようであります。私も年を取ってきてだんだんわかったのですが、西日というのは目と心にやさしい光であります。西方浄土というぐらいで、あちらに極楽があるかなという感じで、夕方に飛行機で飛び立って西日を見たときに、あっちのほうが極楽なのかななどと感じるようになりました。

それに比して、東の光、朝日は目に痛い。若いうちはあの痛さに耐えてガーッと東のほうに向いて行くわけでありまして、神武東征とか、徳川家康の江戸入城とか、人間に力があるときは東へ向かいます。反対に力がなくなると、地球の自転の法則に従って、西へ西へ動くようでございます。

## 人の動きに大きく左右する食糧危機

ヨーロッパでは、15世紀末から16世紀、17世紀にかけて大航海時代というのがありました。昔は「地理上の発見」と言ったわけですが、最近は「大航海時代」と言うようになりました。これもヨーロッパが大変困ったときでありまして、耕すべき畑を耕し尽くしてしまって、これ以上は広がらないというとき、開墾運動がストップいたします。そうすると、穀物の取れる量が一定になってしまいます。

それでも人は増えようとしますから、当時のヨーロッパは相対的に人口過剰となりました。そこで西へ東へ南へと大移動が起きましたが、最終的に人々が大きな希望を抱いたのは、西の新大陸でした。

ところで開墾運動がストップして穀物が取れなければ、肉を食べればいいじゃないかと思われるかもしれませんが、ヨーロッパ人が毎日肉を食べるようになったのは今世紀初めからのことでもあります。19世紀でも、まだ労働者は1週間に1度、日曜にしか肉が食べられなかった。ところが、パンの値段が2倍になりますと、1週間に1度の肉がなくなります。パンの値段が3倍になりますと、革命・暴動が起こる。これが法則のように起こったわけであります。

しかし、これは他人事ではありませんで、日本でも本当に食糧危機が来たらトイレットペーパー騒ぎどころではなく、ついこのあいだまで百姓一揆を繰り返し繰り返してきた民族でありますので、暴動ぐらい起こったって不思議ではありません。

世界中、土壌の劣化、中国を中心とするアジア諸地域の経済の興隆に伴う食糧の多消費、そして世界的な人口爆発という状況のなかで、気の早い人は2010年ごろには食糧危機が来ると言いますし、気の長い人でも2050年ぐらいまでには食糧危機が来るのではないかと言っています。もし本当に来るようであれば、宇宙飛行士なんかになっているよりは、未耕地を探して北海道あたりに移住したほうが子供や孫のためにはいいのかもしれませんが。

ただ、宇宙飛行士になったほうがいいのか、あるいは将来のために百姓をやったほうがいいのか、そういうことはだれも教えてくれない時代です。大きな思想、哲学、ビジョン、イデオロギーといったものが全世界的にフッと消えてしまったのが現代です。したがって、確固たる信念をもって右を主張する人もいませんし、左を主張する人もいなくなり、マスコミは中道を行くようになるわけです。中道右派か中道左派になるということでありまし

て、具体的には事件・事故や犯罪を報道していれば間違いがないということで、やたら暗い話ばかり出てくるということになります。

SARS で死ぬ死ぬといったってせいぜい 700 人～800 人でありまして、日本だけでも交通事故死は年間 9000 人近くいるわけですから、その 1 割にも満たない数字であります、毎日毎日マスクミで騒ぐから、みんなマスクをして不安とともに生きているということになります。確かに現代は不安の時代で、それとともに人は動きます。安心が、切実に求められている時代であると言っていいと思います。ですから、安心を与えてくれる企業や国があれば、そこへ目掛けて人々は大規模に移動すると思います。

### 仏の力、施無畏は安全を安心にまで高めるもの

仏像の形もいろいろですが、右手の指を 5 本真っ直ぐ伸ばして、肩のあたりで外に向けている形があります。たとえば奈良の西大寺の釈迦立像がそうでありまして、鎌倉時代の善慶という人が作った木彫像であります。これは「施無畏」と申しまして、仏様が恐れのない心、安心を施す印です。

施しには「三施」と言いまして、三つのものがあります。一つは「財施」といって財産を施す。これはだれでもできることで、お坊さんに差し上げる御布施などはまさに財施でございます。お坊さんはそれを頂いて代わりに仏法を説く。これを「法施」と申します。これはお坊さんしかできない。普通の人にはできないものであります。三つ目が「施無畏」（無畏施）でありまして、これは仏様にしかできない施しです。恐れを除いて安心させるということです。

では、仏様はどういう安心をくださるかと言いますと、大般若経という膨大な経典がございます。これを 276 文字に縮めたものが「般若心経」というお経であります。「色即是空 空即是色」などはそこに出てくる言葉で、僧玄奘の訳によるものであります、最近はこの僧玄奘の訳は必ずしも正しくないのではないかといわれ、18 世紀のチベット語訳の仏典が、今、新しく注目されているとも聞いています。

この般若心経の一番最後に仏眞の言というのがあって、これは訳してありません。音だけ取っています。よく知られる「羯諦羯諦 波羅羯諦 波羅僧羯諦 菩提薩婆呵」というものでございます。この訳も中村元先生のものをはじめいろいろございますが、これもサンスクリットでは「ガーテー・ガーテー・パラガーテー・パラサンガーテー・ボーデ

イー」と言うようであります。

これを訳しますと、「行こうよ、行こうよ。あちら側（彼岸）へ行こうよ。あちら側へ皆と一緒にいこうよ」ということのようにございます。最後の「菩提」というのは英語では wisdom と訳されておりまして、まさに「自然の叡知」の wisdom であります。要するに「大きな知恵の国へ行こう」とか、「知恵を開こう」ということで、これが普通は「悟り」と言われているものでございます。仏を信じてあちら側へ行こうよということですよ。あちら側と言いましても、小川の向こう側ではなくて、インダス河みたいな大きな河の向こう側ということのようではありますが、「あちら側へ行こうよ」ということで、これが仏の言葉、真言となっているわけです。

### グローバルよさようなら、ローカルよ今日はの現代

そのような大きな安心が欲しいというのが現代であります。安心を求めて、今、人が動いているわけでありまして、何でフランスに 7600 万人も人が来るかといひますと、そこにはローカルな生き方があるからであります。全世界的に経済はグローバル化がどんどん進んでいくわけですが、グローバル化そのものは人間が生きていくうえでの魅力にはならないわけです。あそこに行ってみようと思うのは、グローバルとは全く反対のローカルな生き方に人は魅力を感じます。そこではまさに最近の日本で流行りの地産地消の生き方がある、土地ごとにさまざまに美味しい農産物があり、土地ごとにそれを安く、美味しく料理してくれるしゃれた店があります。「グローバルよさようなら、ローカルよ今日は」です。

フランスがそういう点では一番ピッタリするのではないかと。何もパリだけではなく、地方都市のどこへ行ってもそのような状況があります。パリから東南 200 キロのところヴェズレーという所があります。ここは人口 571 人の小さな町ではありますが、ロマネスク彫刻の宝庫です。ヴェズレーという所は山の上で、なぜかいつも天気の状態が悪く、私も中世のロマネスク彫刻を撮るためにここには 3~4 回行ってはいますが、晴れたのは 1 回だけで、あとは全部雨が降っていました。しかし、秋の日晴れたヴェズレーにいと、新婚旅行に素晴らしいだろうと、思うような景色のいい所あります。

そのヴェズレーの山の麓にサン・ペールという人口 348 人の小さな村がございまして、ここにレスペランス（希望）という名前のレストランがありまして、ここにムノーという優

れたシェフがおります。その料理を食べたいというので、金持ちは200キロ離れたパリからヘリコプターでやってまいりますし、アメリカ人も来ますし、日本人も来ます。あるいは、お弟子さんとしてそこで修業している人も何人もいます。

こういうことは珍しくないことで、あちこちにごさいます。フランスで5本の指に入るチョコレート作りの職人にチュリエスという人がいますが、これはコルド・スュル・シエルという、南フランスの人口932人の小さな町にレストランを開き、その近くにチョコレートショップを持っています。大勢の人が、車で買いに来ます。何でこんな所で売っているのかと聞くと、ここはオレの故郷だからだ、何でパリに行かなければいけないのかと言われてしまいます。最近、日本でもフランス料理を食べると最後に三角形のチョコレートデザートが出てまいります、これもチュリエス氏の考案したものであります。

「失われた10年」は逃げ口上、発想の転換で前進を

最近、経済の点で「失われた10年」ということがよく言われますが、失われればなしの10年なんてあるわけではない。代わりに必ず何か新しいものが生まれているはずで、「失われた10年」はそれが見えていないための逃げ口上であります。その新しいものとは、一つが芸術であり、二つ目がスポーツであり、もうひとつがボランティア活動です。若い人たちが明治以降はじめて情熱を傾け、真価を発揮しているのが美しい生き方と、手足を動かして生きる生き方と、お互い助け合って生きる生き方、共助の感覚の生き方でありま

す。

今、フランスパンを焼かせると国際コンクールで1位を取るのは日本です。2位がアメリカで、3位がフランスです。今年、フランスのリヨンで行われた国際チョコレート菓子コンクールでは、1位がフランスでしたが、2位は日本が取りました。3位はベルギーでした。ベルギーのチョコレートよりも、日本のチョコレートのほうが美味しくなってきました。最近やってきたフランスの友人も、日本のチョコレートが美味しいと言って目を丸くして驚いていました。

この変化というのは病院で寝ているときのようなことではないかと思えます。仕事がどんどん充実して発展していくときに、自分が急に病気になって半年間入院してしまう。これが全く「失われた半年」かということ、そんなことは絶対にありません。いつも天井ばかり見えていますから、確かに理性の窓である目は働きませんが、その代わり、耳とか鼻とか

触覚とかが鋭くなる。主治医が自分の家族とヒソヒソ話している声はよく聞こえるようになりますし、薬のにおいなどには敏感になってまいります。自分の鼻が敏感になると、病院のペイントににおいを取るものを混ぜて独特のにおいを消したらいいのではないかと考えたり、老人ホームには特有の老人臭がありますので、これを取ってやれば若い人たちも来るのではないかとか、別の発想が必ず生まれてくるはずです。

最近、香りに対する感覚も若い人のあいだで非常に高くなってきて、冷酒が好まれるのもまさに香りがいいからであります。その冷えたお酒を冷蔵庫から出すと水滴でビショビショになります。男性は平気ですが、女性などは気持ち悪がってハンカチでくるんで持ったりします。あのビショビショしたものに直接触りたくないのでしょう。病院なんかに寝てみますと、触覚も鋭くなってきて、シーツの肌触りなどに敏感になります。そこで、酒瓶の周りにも布を巻けば女の人にも買ってもらえるのではないかと、別の発想が生まれてくるはずです。

つまり、「失われた 10 年」と言い暮らすのは、過去の栄光、過去の視点にとらわれているからです。新しいものは必ず生まれているはずであります。そのうちの一つが芸術的センスでありまして、国際音楽コンクールなど、日本が 1 位を取るなどということも今は当たり前になってまいりましたし、先だっては日本の女性がロシアから交響楽団を率いて、さっそうとジャンヌ・ダルクみたいにやってまいりました。そういうことも珍しくなくなってきている時代なのです。あるいは、手足を動かしてスポーツに生きるということも、明治以降はじめてのことです。人様にご奉仕して自分も幸せになるという共助の感覚も明治以降はじめて、とくに、阪神大震災以来、活発になってまいりました。

「住んでよし、訪れてよしの国づくり」

そこで、こういったものをこれから大いに生かすべきではないかと思うのです。まず、大移動の際にどこに人が集まるかという、やはり都市に集まってきます。都市も、そこに住んでいる人にとってだけではなく、よその人にとっても魅力のある都市に人が集まるわけで、単にホテルがいっぱいあっても都市それ自体に魅力がないと人は参りません。「住んでよし、訪れてよしの国づくり」が大切です。

日本に外国から人が来ない理由に物価高ということがよく挙げられますが、これも逃げ口上です。今度の観光立国懇談会の初めにも、「外国のホテルなんかのほうが高いよ」と

総理はおっしゃいましたが、確かに高い。パリなど1泊5万円もするホテルが珍しくない。しかも値段のわりに中身がよくない。ロンドンのホテルはいよいよ高い。むしろ日本のホテルは設備からするとじつに安い。だから、日本の物価は高いというのは言うのはやめようということになりました。

そう考えると、日本に人が来ないのは魅力がないせいではないかということになりました。魅力とはなんぞや。とくに都市の魅力とはなんぞやということになりますと、ウィーンで会議をやればウィンナコーヒー（アインシュペナー）の匂いがしてまいりますし、いい音楽が聞こえてきて、それだけで頭にウィーンのイメージが浮かんでまいります。パリですと、ルーヴル美術館とかオルセー美術館、食事とかが頭に浮かぶ。ロンドンだと大英博物館とか、それぞれ都市の魅力、とくに目・耳・鼻・口・手足にとっての美しさ、心地よさの魅力があるわけです。この美しさと、安心と、わかりやすさの三つが、都市の魅力として大事なのではないか。

#### 美しさの感覚を追求して安心の場所を構成

三つのうちの一つ、美しさの感覚についてですが、沢山の人が町へやってきて、知らない人ともそこでお互いに友達になり、そのなかから知恵を出し合う。知恵の手詰まりの時代にあって、お互い知らない人どうしても友達になりあえるというのは非常に重要です。そのためには、町全体が美しい感性空間である必要があります。

愛知万博にしましても、お互いに友達になりあえるような万博にしたい。いわば「友達博」を目指す。これまでのように単に技術を見せるのではなくて、知らない人でもそこに来るとお互いに友達になりあえるような美しい感性空間をつくりたい。菊竹先生にお願いして、木とか竹とかを積極的に使う。あるいは照明についても、これは石井幹子さんがやっていますが、50ルクス以下の昔の行灯や提灯や蠟燭の光を使う。これは安心の光と言えます。これだと人が絶対に仲良くなれる。ろくに顔が見えませんが仲良くなれるというわけです。

美しさの感覚ということで言いますと、仏壇とか仏間というのがそれをよく表しているように思います。蠟燭に火をつけると、あのオレンジ色の光に誘われて亡くなった人の魂が家へ戻ってくると言われています。あれは安心の光であります。これは洋の東西を問わず言えることで、これに抵抗できる人はいません。戦後のお寺さんに人が来なくなったの

は、本堂を蛍光灯にしたせいではないかという気がします。あれでは人が集まらないんで、あそこの光は蠟燭でなくてはならないと思います。そこで、あのオレンジ色の光で都市全体の照明を行えば、これは安心の光になるのではないか。その点では、ソウルのほうが東京よりもはるかによく出来ていると言えます。

お灯明を立てると亡くなった人の魂が家に戻るといいますが、今度はお線香に火をつけると、いい香りに誘われて位牌に魂が戻ってくるそうです。いい香りというのも、人の心を休めるうえで非常に大事なものです。それに、昔は電気がありませんでしたから、黒い漆で塗られ、金文字で書かれている位牌は、蠟燭の火が動くことによって、あたかも金文字が揺れて生きているように見える。そこで、位牌を見つめているうちに、亡くなった方と会話ができる。婆さまはあのお位牌を見つめながら、お経を通して爺様と話をしていたのではないかと思うのです。

これと同じようなことを谷崎潤一郎が『陰翳礼讃』という作品の中で書いております。漆は電気の光で見るとピカピカして浅薄な感じがするが、いったん電気を消して蠟燭の灯で見ると浅薄な感じがスッと消えて、蒔絵などがフッと浮かび上がってくる。これが日本の美しさであると言っていますが、まさにそのとおりだと思います。漆器類を販売する場合も、照明には一番気を使わないといけないということです。

お正月が来てお重をお出しになったら、ぜひ電気を消して蠟燭をお立てになってみてください。お互いが仲良くなるはずです。電気のままだと「お互いに年を取ったねえ」なんて言いながらがっかりしてしまいますが、そのへんが見えなくなるわけです。

## 大切な感性空間とコミュニケーション

蠟燭の光とお線香の香りで位牌が生きているように見えるのですが、そこにいいおりんの音が加わったり、供花があり、亭主が好きだったお酒が載っていたりするわけで、あの空間は見事な美しい感性空間であったはず。そこでは、死んだ人とでもコミュニケーションができる。

読経のような声は、人の心と心をつなぎ合わせます。ヨイトマケの労働歌もあれでもって心が結ばれますし、田植え歌も人の心と心をつなぎ合わせます。あるいは子守歌もそうでありまして、お母さんと赤ちゃんは確実にあの声で結ばれていたはず。

最近、癒し系のCDが流行のようではありますが、香の添えてあるCDも出てまいりまし



た。お香に火をつけて一緒に聞いてくださいということですが、これは確かに心の休まるものだろうと思います。

御詠歌もそうでありまして、お遍路さんがいろいろな地方からお札所に集まってくる。それぞれ違う悩みを背負っているわけですが、お札所で一緒になってご詠歌を歌ったり、お経をあげる。そうすると自然に心と心が結ばれてまいります。

「旅は道連れ世は情」で、一緒に次のお札所まで歩きます。そのとき、普通は口をききませんが、ぼつりと自分の背負っている悩みを口にする場合もある。相手に答えを期待するわけではないのですが、口に出しただけで心が軽くなる。四国八十八箇所めぐりを終えて満願成就いたしますと、生まれ変わるという発想がありますが、それは当たっているのではないかと思います。心が軽くなれば身心ともに元気になるはずであります。

知らない人どうしの結び合いなんかつまらないものじゃないかと思われるかもしれませんが、そんなことはありません。むしろ地元にいればこそ話せない悩みもあります。あるいは、親類縁者、家族のあいだからこそ絶対話せない悩みはあるものです。一人旅の旅先では地縁・血縁とはプツツと切れていますから、お互いに本当の意味の心の救い、結び合いが出てくるのではないかと思います。

厚生労働省は地域と家族による福祉を中心に考えていますが、実は動きのなかでお互いに心と心の結び合いを強くしたり、心の救いを得る、旅による福祉ということがあってはならないかと思うのです。

#### 先が見えない時代が少子化社会をつくる

小室哲哉の歌を聴いていると、ご詠歌そっくりであります。あまり、抑揚がない。若い人もあんなご詠歌を好んで歌っているのかと不思議に思います。

今の若い人は、全体に心が暗いのではないかという気がします。先の見通しもはっきりしませんし、やたらと友達が欲しくてメールで友達をつくらうと懸命です。しかし、それも本物にはならなくて、悩みが大きいのではないかと思うのです。そして、それがまた今の少子化に結びついています。年寄り子育ての苦勞が済んでしまっているものだから、子供を生め、子供を生めと言うのですが、若い人のほうは、子供を3人も5人も生んで本当に責任をもって育てられるのかと心配をしています。世の中がどうなるかわからないのに大丈夫なのかという気持ちが絶対にあるので、そのへんは若い人に同情すべきです。

「少子化対策有識者懇談会」という厚生労働省の坂口大臣の私的諮問機関がありまして、その座長として、昨年報告書を提出いたしました。若い人が中心で、何かよくわからないのだけれど、なんとなく生みたくないんだという声があがっておりました。その気持ちはわからないではない。昔みたいにどんどん生々発展するという確実な保証があるなら 10 人以上生んだっていいんで、それは一家繁栄のしるしかもかもしれませんが、いまの世の中では生めないのではないか。

江戸時代の 18 世紀、19 世紀に今と同じようなことがありました。新田開発がストップして、人口 3000 万人分しかコメが取れないと決まってしまった時のことですが、これが約 200 年間続きます。そのときは人口が 3000 万人に固定され、長男しか結婚できないということで、次男、三男は一生独身でありました。これは農家だけでなく、武士もそうでした。大名になると三男坊ぐらいまでは分家して結婚できますが、四男、五男になると結婚は難しくなる。

つまり、これ以上発展しないということで先が見えているときに、子供をどんどん生んでいってみんなに田圃を分けてしまったら全員が食べられなくなる。これを「たわけ（田分け）」と言ったとかいう俗説もありますが、それぐらいの窮状があって長男だけが子供を生み、親の家督、田畑、宗教も相続して、次男以下は一生独身で過ごし、長男の畑を耕させてもらい、長男の子供の面倒を見て終わるという状況だったのです。

ヨーロッパでもついこのあいだまで未婚のおじさん、おばさんが沢山おりましたが、どこでもそうになっていた。限定されてしまっている状況のなかで、子供をどんどん生むなんていうことはありえないことでありまして、その意味で今の少子化を防ぐ手だてはないということになります。

#### 空間感覚を拡大することで希望が増大させる

ただ、空間感覚が広がりますと話は違ってまいります。フランスは、今、1.9 まで出生率は回復しております。日本は 1.33 であります。フランスが回復したのは、EU がどんどん拡大していき、フランスはもともとローマ法の直接の後継者とみずから信じて疑わないものですから、フランスで弁護士の資格を取ればヨーロッパ中で活躍できる、そうになると、子供が沢山いると親は儲かるという発想が出てくる。たとえばそういうことで、今、また、どんどん子供を生んでいるということでもあります。

しかし、イタリアとドイツと日本は子供が生まれません。昔、日独伊防共協定というのがありまして、「生めよ・増やせよ」と言った所は、いまだに女性たちからしっぺ返しを食っているというわけです。今の世代は直接の体験はないはずですが、女の恨みは灰になっても残ると申しますので、ひいばあちゃんの恨みがまだ残っていて、日・独・伊だけは子供が増えません。

フランスは空間感覚を拡大することを通してまた希望が出てきたということでもあります。その意味では、これからは日本をアジアの方向に開いていくことも大事で、そうなりますと、犯罪なども増えて悪いこともあります。より大きな活力がそこから生まれてくるのではないかという気がします。

21世紀は明らかに西の時代、ユーラシアの時代だと思っております。人間、不安なときには西へ動きます。19世紀から20世紀にかけても、第一次世界大戦が終わるころ、ヨーロッパの都市化が進み、地方からどんどん都市へ人が集まってきて、無宗教的に、無機的に漂うように生きるようになる。これがヨーロッパの終焉であるとシュペングラーという人が言って『西洋の没落』という本を書きました。

科学や技術のほうも、文化だの風土だのとごちゃごちゃ言う人が出てきますと具合が悪いものですから、そんなことを言わないアメリカへ動いたわけです。1918年から1973年、第一次オイルショックとベトナム戦争の失敗までの55年間が本当のアメリカの時代でありまして、ここでは西部劇でも一番よかった時代です。インディアンは悪であり、白人は善であるとはっきりしていた時代であります。

1973年という年は第一次オイルショックの年でありまして、技術文明がつまづいた年であり、同時にアメリカが最終的にベトナムに敗北した年であります。つまり、「力は正義なり」というアメリカのそれまでの生き方に楔が打ち込まれたときです。そこからアメリカも西を向くようになりました。これがアジア・太平洋の時代であり、最近ではそれがさらに進み、ユーラシアに自分たちの拠点を設けたいという気持ちに変わってきた。今度のイラク戦争がまさにこれでございます。彼らは、また、さらに真剣に西を向いております。したがって、ヨーロッパとのあいだの亀裂がいよいよ大きくなってきつつあるという状況が現実にあるわけです。

日本は、今、アメリカとピッタリくっついておりますが、これではたして本当にいいのかどうか。ユーラシアの一角として日本を開いていくということがわれわれに求められているのではないかと思うのです。国を開くと悪いことも確かにありますが、それ以上にいい

いことがあるわけで、そうなる若手人たちの目も輝いて、子供も生むようになるのではないかという気がしております。

### 美しさ・安心・わかりやすさのなかに動きのある日本を

ともかくも、今はそのような動きの大転換期であり、美しい感性空間のなかで、お互いに仲良くなり合い、友達になり合い、「安心」を得る。そのためにはわかりやすさということが大事になってまいります。日本という国は非常にわかりにくいといわれます。

東京都も、地下鉄がクモの巣のように広がって、東京都民にも何が何だかわからなくなっていますので、あれのナンバー化を考えているようです。浅草線は1号線とか、丸の内線は2号線とか、パリのような形を考えているということです。

また、外国の人にも安いものを食べていただくためには、日本には素晴らしい食品サンプルというものがありますから、店先の食品サンプルに1番、2番、3番と番号さえ付けておいてくれば、「きつねうどんは英語で何と言うの？」などと考えずとも、きつねうどんが1番としてあれば、外国の人も店に入って「ワン」と言えばいいわけです。ワンとかツーぐらいは、いくら日本人が英語がわからないといってもわかるのではないかと。

つまり、美しさと、安心と、わかりやすさこそが、地域とか国の「魅力」を形づくる。それによって動の時代における日本の繁栄を、観光立国によって図り、観光客の増大により地場産業の新たな発展を実現していくことが大事ではないかと思われまます。

### 日本の伝統「動く文化」を広げる時代

日本はもともと、動く文化をもっております。回り舞台は日本から始まったものであります。18世紀の半ば、大阪の角座から始まったもので、たちまちこれが江戸の歌舞伎に影響を与え、世界中の回り舞台へと発展してまいりました。中華料理の円卓も日本からのものがございます。中国では回らなかったものが最近では回りだしているわけです。これが縦に回るとパチンコになり、今や回転寿司にまで発展しています。

この回転寿司も世界的に大流行りで、一番大きいのはロンドンのソーホー街にある60メートルの回転寿司で、125席あります。4台のテレビを備えておりまして、寿司を握っている場面を写して、ちゃんとうちは握っているんだぞ、型押しじゃないぞということ

アピールしています。

しかも、飲物を運んでくるテーブルまでが自動ロボットで動いておりまして、客席の間をガガーッガガーッと動いておりまして、「オイ」とか「コラ」とか「ストップ」と声を掛けるとピタッと止まる。これがえらい評判であります。動いていれば評判がいいんで、したがって「アシモ」、本田技研さんのロボットも大いに評判がいい。

ロボットと言えば、高校生のやるロボットコンクールも大変な人気です。愛知万博でも、ロンドンが 60 メートルの回転寿司なら「600 メートルでやる」と冗談に言いましたところ、マスコミがいつまでも覚えておりまして、本当にやるのかとうるさい。実際は 600 メートルというのはなかなか難しい。最大でも 340 メートルぐらいらしいですが、これもなんとか菊竹先生のご助力を得て実現したいと思います。そうめん流しがいいと先生はおっしゃっていますが、そういう動くものがないのではないかと考えているところでもあります。

もともと動く文化が、日本にはございます。よく日本は動かない文化であるといわれます。竜安寺の庭などを写して、あそこに年寄りがじいっと座っている姿を想像するとか、小津安二郎監督の「東京物語」などで、笠智衆などの俳優がじいっとしていて、たまに「そうか」と一言言う。

日本というそういう姿ばかり思い浮かべますが、庭園にしても、江戸時代の庭園は回遊式庭園で、後楽園でも兼六園でも、観る人が回って見ないとあの庭園のよさはわからないわけです。ルイ 14 世のベルサイユ宮殿みたいに、幾何学的なデザインの庭園があって、これを静止してじっと眺めるのではなく、近世日本の不安な時代の庭園は、動く庭園であります。ししおどしなども、カタッという音を聞いて楽しむのです。

本来、動くという性質がわれわれにはあるのではないかと思います。ベンチで半日もじっとしてられるのはヨーロッパ人のほうでありまして、日本人は公園のベンチに座っていても、15 分も経つとパーッと立ち上がってどこかへ行ってしまいます。仁王様が紅蓮の炎の中でしっかりと立っているのは、ああいうときに動きだすはずなのに動かないのが偉いというので見られているのではないのでしょうか。座禅にしても、われわれがしょっちゃん動いているから、たまには動かないで精神修養せよということでピシッとやられているわけで、本来、日本人は四六時中、状況の変化に敏感に反応して、現実にはよく動く民族ではないかと思うのです。だからこそ「動かない」ということが高く評価されてきたのではないのでしょうか。

その国民性、民族性が、今の時代にピタッと合ってきた。まさに「動の時代」、ヒト・

モノ、みな動く時代です。その意味で動の日本文化を、全世界にこれから広めていくときではないかと思います。私の話をこれで終わらせていただきます。どうもありがとうございました。